

金子彌平

——ある「明治人」の軌跡——

姫路獨協大学講師

金子 宗 徳

はじめに

明治期を代表する思想家・福澤諭吉「一八三四年十二月十二日〜一九〇一年二月三日」が、次のやうな一文を残してゐる。

金子氏の始めて拙宅に來りしは今を去ること二十六年、明治五年春の頃なり。其來るや他人の紹介あるに非ず、始めて相見て始めて相識り、宅に眠食して慶應義塾に学ぶこと三年、去て鹿児島に行き、又支那に遊び、後大藏省の公用を帶て米國に赴任し、近年又臺灣に行く。前後年久しく事務亦繁なるが如し。余に於ては確と其年月日を記憶せず、又其何事を為すやを知らざれども、交情は則ち二十六年一日の如くにして曾て替ることなし。頃日は昔年余が贈りたる手紙を表装して一軸と為し、特に余に示したり。之を見れば紛れもなき拙筆にして自から懷舊の情なきを得ず。由て一言を軸首に記して之を還す。¹⁾

冒頭に登場する金子氏とは、金子彌平「一八五四年十二月二十五日〜一九二四年二月十七日」のことである。今日、その名を知る者は少ないが、酒井正敏の『近代日本における対外硬運動の研究』（昭和四十五年刊）に名前を見ることができ、幾つかの人名事典にも、「金子彌平（弥平）」といふ一項がある。参考までに、『朝日歴史人物事典』（筆・波多野勝）の

記述を引かう。

明治大正期の満州（中国東北部）開拓者。南部藩（岩手県）出身で慶應義塾に学ぶ。北京公使の随員として北京に渡り、帰国後東京で中国語学校を創設した。その後品川弥二郎の知遇を得て外務省に入ったが、品川が国民協会を組織したとき（1898）、辞して同協会のため尽力した。そして再び渡清して營口に日本雜貨店を開き、また満州物産流通の事業に従事、日露開戦（1904）に伴い鴨緑江の樹木事業や高粱酒醸造に成功、さらに安東県市政にも参画した。晩年は京都で隠棲して中国革命家と交流があつた。⁽²⁾

この記述は『東亞先覺志士記傳』や『對支回顧録』の記述を要約したものと思はれるが、それらの二次史料に依拠した結果、その記述は精確なものとは云へぬ。

本稿では、『興亞會』や『國柱會』など——彌平が深く関つた諸団体の機関誌などを手がかりに、「明治人」として生きた人物の軌跡を辿つてみたい。

一、立 志

(一) 花巻時代

金子彌平は、安政元（一八五四）年十二月二十五日、南部藩・花巻城下の川口町（現在の岩手県花巻市）において、金兵衛・ツネ（常）夫妻の長男として生を受けた。折しも、同年の三月には「日米和親条約」が締結されてゐた。金子家は、源平合戦において勇名を馳せた——金子十郎家忠の流れを汲むとも云はれるが、延宝年間（一六七三—一六八一年）以前に、近江から同地に移住したといふのが事実であるやうだ。⁽⁴⁾

こゝで、花巻といふ土地の歴史を簡単に振り返つておきたい。天正十九（一五九二）年八月、豊臣秀吉から北上地方の三郡（稗貫・和賀・志和）を加封された南部信直は、南接する伊達領との国境に近い要地を治めるべく、一門である北信愛の次男で、剛勇を以て知られた秀愛を鳥谷ヶ崎城（直後に花巻城と改める）の城主とし、花巻郡代とした。北氏の断絶後は、藩主・利直の次男である政直が花巻城主となり、その死後は、盛岡から城代（郡代）が派遣された。これらの城主や城代（郡代）は、よく城下の開発に努め、最初に四日町を、続く慶長十八（一六二二）年に川口町を拓いた（これらに一日市町を加へて「花巻三町」と称し、江戸時代を通じて四〇〇〇〜六〇〇〇人の人口を誇つた）。北上川支流が形成した川洲を「南方との物資交送の為に」利用したのである。金子家の祖先は、比較的早い時期の移住者といふことになる。

なほ、金子家は「糸屋」といふ屋号を持ち、近在に地所を保有する大きな商家であつた。安政二（一八五五）年刊行の『東講商人鑑』⁽⁶⁾には、「細物匂油店」として、祖父の彌右衛門の名が残る。また、家伝によれば、藩から町内の警察権を司る「検断」の地位を与へられ、士分として苗字帯刀も許されてゐたともいふ。

数へで一三歳の時にあたる——慶應二（一八六〇）年、彌平は藩府・盛岡の「葉舖村井氏」⁽⁷⁾において丁稚奉公を始めたが、「其事ノ意に適セサルヲ以テ主家ヲ脱スルコト再三」⁽⁸⁾に及び、遂には生家へと戻つたといふ。

この頃、時代は大きく動き始めてゐた。慶應四（一八六八）年一月三日、鳥羽・伏見の戦ひを契機に戊辰戦争が勃発し、新政府側の強硬な態度に反感を強めた奥羽諸藩は、『奥羽越列藩同盟』を締約（慶應四年閏四月二十九日）する。当然、盛岡藩も『同盟』に名を連ねたが、藩内には——東政図（南部次郎）「一八三五年九月十七日〜一九二二年三月三日」を中心とする——新政府派も存在し、その態度は定まらなかつた。しかし、西隣の秋田藩が同盟を離脱したことを契機に、藩論は『同盟』側として参戦することに決し、榎山佐渡「一八三二〜一八六九年六月二十三日」を総大将とする諸隊は秋田藩領に進攻した。緒戦こそ順調に勝ち進んだが、次第に戦局は不利となり、明治元（一八六八）年九月二十四日、

降伏のやむなきに至る。会津藩に遅れること二日、《同盟》側最後の降伏であつた。

その後、盛岡藩に対して、藩主・利剛に対する隠退謹慎、盛岡（二〇万石）から白石（二万石）への転封などが命ぜられ、旧藩領は新政府の直轄地となる。その後、版籍奉還後の明治二（一八六九）年七月二十二日に南部家の盛岡帰還が認められるまで、同地の政情は安定を見ない。自らを取巻く環境が激変する中、「家産ヲ事トセス頗ル讀書ヲ好んだといふ彌平は、「有爲ノ志」を懐き続けた。⁽⁹⁾

（二） 上 京

明治四（一八七二）年、上京した彌平は、東の下に身を寄せ、「照井小作先生ニ就イテ和漢ノ學ヲ」⁽¹⁰⁾修めた。盛岡出身の照井小作（全都）「一八一九年十一月〜一八八一年二月二十一日」は、一宅とも螳螂齋とも号し、藩校《作人館》の助教を務めた儒学者である。南部氏が旧領に復帰し、弟子であつた東が藩の大参事に就くと、少参事に登用された。その後、治藩事を辞した南部利恭に従ひ、明治三（一八七〇）年に上京してゐる。「寵眉鋸眼、胸毛毳々然」⁽¹¹⁾であつた照井は、「身を持つること雍容温厲、造次にも必ず禮法に於てす。而も沈思寡黙、喜愠の色を見ず。常に至誠を以て人に接す。然れども言辭簡嚴、流俗に隨はず。故に知らざる者は以て固とせり。」⁽¹²⁾との評が今に残る。その学問は、获生徂徠「一六六六〜一七二八年」の流れを汲むもので、安井息軒「一七九九年二月五日〜一八七六年九月二十三日」は「照井先生経述甚深、僕の企及する所にあらず」と語り、支那革命運動の指導者・章炳燐「一八六九年一月十二日〜一九三六年六月十四日」は、その著書『論語解』を絶賛したといふ。

冒頭に紹介した福澤の小文によれば、彌平が福澤を訪ねたのは、明治五（一八七二）年の春とされてゐる。しかし、『岩手縣国會議員列傳』（明治二十二年）所収の「金子彌平君ノ傳」には、「明治五年冬慶應義塾福澤先生ノ門ニ入り」と書かれ、『慶應義塾入社帳』には、「金子彌兵衛」の「社中ニ入タル月日」が「明治六年五月五日」と記されてゐる⁽¹³⁾

から、これは福澤の記憶違ひかも知れない。

彌平は、福澤家に寄寓し、「門下ニ役事シ以テ月謝塾費等ヲ補⁽¹⁶⁾」つた。そのため、諭吉の子息達（太郎・捨次郎）とも、「幼稚の時より知る⁽¹⁷⁾」間柄であつた。また、「人ト來往交遊スルヲ避ケ恒ニ獨居靜坐シ沈思黙考⁽¹⁸⁾」してゐたといふ。そのせいか、課業における席次も上位を維持し、「原敬氏等と共に、盛岡三秀才の令名著しか⁽²⁰⁾」つたと伝えられる。だが、「求メテ而シテ得サル所アルモノ、如シ⁽²¹⁾」とも評されるやうに、その内面には烈々たる思ひを秘め、「偶々人ト談論シ談時事に及フトキハ悲憤慷慨立論多ク人ノ意表ニ出⁽²²⁾」たとの逸話も残つてゐる。

彌平自身の回想によれば、「明治七八年の頃」から「東洋西洋を打つて一丸と爲し政治的に之を統一する⁽²³⁾」ことを志したといふ。けれども、そこに師・福澤の直接的影響を見出すのは難しいだらう。時あたかも、征韓論争（明治六年）や台湾出兵（明治七年五月）、江華島事件（明治八年九月二十日）などを背景に、対アジア政策が問題となる時期であつたが、「我獨立は歐米に對立して始て満足す可き⁽²⁴⁾」と論ずる福澤は、征韓論について、「其所見近淺にして方向を誤るのみ⁽²⁵⁾」（明治八年十月）と述べるなど、一連の動きには冷淡な態度を示してゐた。

一方、彌平の後見人的存在である東は、積極的に行動する。明治六（一八七三）年七月二十一日から約八カ月間、「臺灣征蕃の擧に對する支那内情視察」といふ「政府の内命を奉じて清國に赴⁽²⁶⁾」き、台湾出兵に際しては、旧南部藩士を率ゐて清國領内を攪乱する計画さへ立て、ゐた⁽²⁷⁾。なほ、当時の彌平は、次のやうな志を友人に語つたとされる。

我カ日本ハ彈丸黒子ノ小國ナリ然レドモ地理の然ラシムル所人爲ヲ以テ東洋ノ英國大陸ノ盟主タルニ至ラシムルコト亦難キニアラサルヘシ余ハ一身ヲ犠牲ニシテ此事ヲ試ミント欲ス且ツ此事ヲ試ミンニハ先ツ清國ノ事情ニ通曉シ同國ニ於テ為ス所ナカルヘカラス⁽²⁸⁾

二、「支那通」への途

(一) 鹿兒島から北京へ

明治八(一八七四)年、《慶應義塾》を出た彌平は、鹿兒島に下つた。⁽²⁹⁾ 同地では、《私学校》の講師でもあつた今藤勇⁽³⁰⁾「生没年不詳」に学びつ、「常二同地ノ先輩名士西郷南洲翁桐野利秋氏等ノ門ヲ叩キ平生ノ意見ヲ吐露シ」⁽³¹⁾、西郷に「いまだ其の時機にあらず」⁽³²⁾と逆に論されたといふ。

明くる明治九(一八七五)年の夏に帰京した彌平は、再度の渡清を目論む東の「前驅」⁽³³⁾として、同年七月に「外務省在清國公使館在勤通辯見習ヲ命セラレ」⁽³⁵⁾、註清全権公使・森有禮「一八四七年八月二十三日〜一八八九年二月十一日」に「随伴シテ清國ニ」渡り、「留ルコト四年博ク同國ノ人士ニ締交シ或ハ内地ノ旅行ヲ爲シ主トシテ同國ノ事情ニ通曉センコトヲ務メタ」⁽³⁶⁾と伝へられる。

明治十二(一八七八)年六月には、内務省を罷めた東も「清國政況視察の名の下に官費を以て」渡清して来る。⁽³⁸⁾ 東は、「久しく聖人の教廢れ、王道地に墜ち」てゐる清朝を「改造し以て萬世の功業を建てんとするには革命に依て民心を一新するの外はない」と、日頃から主張してゐた。⁽³⁹⁾ 同地には、森の甥で、彌平と同じく通辯見習でもあつた伊集院兼良「一八五八年三月二日〜」⁽⁴⁰⁾といふ青年も滞在中であり、彌平を加へた三人は「義兄弟の約を結び他日相携へて大いに爲すあらんことを誓」ひ、東の援助を得て、彌平と兼良が「蒙古に入り、以て同志の士を集め」ようとした。⁽⁴¹⁾ しかし、「蒙古の何れの邊に出入したか、又如何なる成果ありしかは不明で」あり、「特に傳ふべき格別の事柄もなかつたやう」⁽⁴²⁾だ。

(二) 《興亞會》 結成

明治十二(一八七八)年十二月に帰国した彌平は、「支那通」⁽⁴³⁾として活躍し始める。その舞台は、翌年の二月に発足した本邦初のアジア主義団体・《興亞會》であつた。

《興亞會》の創設時から、彌平は大きな役割を担つてゐた。「興亞會創立ノ歴史」は、次のやうに記す。

昨冬(明治十二年冬)——引用者註)ニ至ル偶マ金子彌^マ兵衛氏清國ヨリ歸ル會根氏ト舊交アルモノ方今亞細亞ヲ振興スル唯合從ノ一策アル緣由ヲ述ヘ頗ル振亞社ノ學ヲ贊成ス又是ヨリ先キ會根氏學校ヲ設ケ諸有志ヲ招集シ支那語學ヲ授ケント欲セリ金子氏亦此ノ學ヲ以テ合從ノ策ヲ実施スルノ初歩ナリトス⁽⁴⁴⁾

文中の會根氏とは、會根俊虎「一八四七年十月六日—一九一〇年五月三十一日」である。米沢藩の儒者・會根俊臣の子として生まれ、雲井龍雄「一八四四年三月九日—一八七〇年十二月二十八日」の感化を受けた俊虎は、海軍隨一の「支那通」であり、明治十一(一八七七)年に「亞洲諸國ノ衰弱ヲ振起シ^マ。之ヲ往昔ノ隆盛ニ挽キ回サン⁽⁴⁵⁾」として、東や前田獻吉「一八九四年十二月二十一日」らと《振亞社》を創設してゐる。

俊虎は、明治九(一八七六)年二月から明治十一(一八七八)年一月まで、「諜報竝に軍需品調達⁽⁴⁶⁾」の命を受けて清國に滞在してゐた。彌平と知り合つたのは、この時期であらう。「興亞會創立ノ歴史」は、二人の積極的な動きを次のやうに語る。

會根氏自ラ長岡護美渡邊洪基佐藤暢ノ三氏ニ謀ル三氏亦頗ル亞細亞ノ頽靡ヲ嘆スル者ナルヲ以テ大ニ此學ヲ贊成シ共ニ尽力ス可キヲ約ス金子氏乃チ之レヲ草間時福氏ニ謀ル草間氏亦嘗テ東洋連衡ノ宿論アリ意氣相投シ共ニ始終ヲ謀ル可キヲ誓フ宮崎駿兒氏ハ嘗テ支那ニ遊ヒ其見素ト會根金子等ニ同シ大ニ此ノ學ヲ贊成シ同志ノ列入ル⁽⁴⁷⁾

なほ、文中の草間時福「一八五三年五月十九日〜一九三二年一月五日」は、京都に生まれ、安井息軒や中村正直「一八三二年五月十六日〜一八九一年六月七日」の下で学んだ後、明治七年四月から慶應義塾に籍を置いた。⁽⁴⁸⁾彌平と知り合つたのは、この頃だらう。その後、明治八（一八七五）年から十二（一八七九）年にかけて松山英学校の校長を務めつゝ、同地で「愛媛新聞」を創刊し、民権思想を熱烈に鼓吹した。

明治十三（一八八〇）年二月十三日、一〇数名が久保町の賣茶亭に集まり、《振亞社》を《興亞會》と改称し、「投票ヲ以テ長岡氏ヲ會長ニ渡邊氏ヲ副會長ニ曾根金子草間ノ三氏ヲ幹事ニ撰舉」⁽⁴⁹⁾すると共に、「興亞會假規則」⁽⁵⁰⁾を定めた。會長の長岡護美「一八四二年九月十九日〜一九〇六年四月八日」は、旧熊本藩主・細川護久の実弟であり、副會長の渡邊洪基「一八四八年十二月二十三日〜一九〇一年五月二十四日」は、旧福井藩出身の外交官であつた。そして、「三月九日午後第三時神田錦町學習院ニ於テ第一會同ヲ開」⁽⁵¹⁾き、彌平は張滋昉の演説を通訳してゐる。なほ、出席者は以下の通りである。

渡邊洪基 曾根俊虎 金子彌^ウ兵衛^ウ 草間時福 佐藤暢 宮崎駿兒 櫻村清徳 前田獻吉 小牧昌業 白井政夫
荒木卓爾 杉本懶雲 田付影行（長尾景弼代理） 鉅鹿赫太郎（何如璋代理） 廣部精 宮島誠一郎 小森澤長政
鄭永寧 山吉盛義 本田親雄 鍋島直大 赤谷信義（三島通庸代理） 池田謙藏 野本民治（高橋由一代理） 恒屋
盛服 鈴木慧諄 北澤正誠 大久保利和 柳原前光 坂坦政徳 下間繼旦 森下岩楠 石黒磐 横尾一郎（等野
吉次郎代理） 松平忠禮 吉田晚稼 黒岡帶刀 高島龜太郎（有馬純行代^ウ） 海賀直常 末弘熊五郎 矢口定親 赤
松則良 重野安繹 田代離三 佐藤甫 高橋基一 佐藤眞琴 中村正直 武藤平學 星野重次郎 張滋昉 梅田
義信 大草孝暢 石田常直（山吉盛典代^ウ） 丸山孝一郎⁽⁵²⁾

(三) 啓蒙家として

第一會同の席上、渡邊洪基は次の如く演説してゐる。

亞細亞諸邦即チ日本朝鮮滿洲支那安南緬甸ノ如キハ人種相同シク文教相殊ナラス暹羅天竺ノ如キハ人種相同シカラサルモ宗教ノ源多ク之ニ出ツ然ルニ地理不便ニ因ル者ノ如シト雖ドモ古來各國交通甚ク交戦講話ノ事少ナクシテ爲メニ相競争スルノ勢ナク又輔車相依ルノ念ナク其弊ヤ各邦萎靡シテ振ハス文教學術共ニ開進セズ遂ニ他族異教異文ノ歐米諸國ノ侮ヲ受ク⁽⁵³⁾

渡邊は、「亞細亞諸邦」同士の交流が希薄であるがゆゑに、「歐米諸國」の侮りを許してゐると論ずる。当然ながら、「亞細亞諸邦」同士の交流が図られねばならぬが、それは「特リ官府公然ノ交際ヲ以テノミ之ヲ能クスヘキ者ニ非ラス彼國ノ志士此國ノ志士ト居常相交ハリ意氣相通スルニ因ラサル可カラサル」⁽⁵⁴⁾ものである。そこで、「亞細亞諸邦ノ人士」が「親交シ且ツ形況ヲ互ニ相知ラント」⁽⁵⁵⁾するために《興亞會》を結成したと続ける。

この目的を達成すべく、《興亞會》は様々な啓蒙活動を展開した。中でも特筆すべきは、明治十三（一八八〇）年二月十六日に《興亞會支那語學校》を開設したことであらう。⁽⁵⁶⁾會根を校長とし、芝区西久保巴町の榮壽寺に置かれた同校において、彌平は「散語」の講義を担当した。⁽⁵⁷⁾同じ頃、《慶應義塾》に創設された支那語科でも教鞭を取つた。⁽⁵⁸⁾

加へて、「亞細亞洲ノ大勢ヲ討究シ」⁽⁵⁹⁾た彌平は、「亞細亞洲史論略」といふ一書を著してゐる。残念ながら、全四冊であつたといふ同書の全貌は詳らかにしないが、⁽⁶⁰⁾《興亞會》の機関誌である『興亞會報告』に抄録された部分を紹介したい。⁽⁶¹⁾

『興亞會報告』（第二集 掲載の「亞細亞洲總論略」）では、歐亞の歴史を回顧し、「歐洲ノ文物、實ニ亞州ノ賜ニシテ、亞州文物ノ歐洲ニ先ズルコト二千有余年、歐洲文化ノ興ルハ今ヲ距ツルコト僅カニ五六百年、⁽⁶²⁾吁同日ノ論ニ非ラザル」⁽⁶²⁾にもか、はらず、歐亞の現状が逆転したのは、アジア人が消極的・受動的であるのに対して、ヨーロッパ人が積極的・能動的であるからだと指摘する。しかしながら、両者とも同じ「丈夫」であるのだから、「文物ノ隆替、

邦國ノ盛衰ハ、タダ其人ノ爲スト爲サザルトニ在ル⁽⁶³⁾と論じ、文明開化を着々と達成しつゝある日本人は、「邦内ニ止マラズ、猶ホ進ンデ全洲ト爲ス所ヲ共有シ、以テ亞州數千百年ノ頽廢ヲ挽回シテ、歐州ノ富強ト争雄⁽⁶⁴⁾」すべきと、アジア諸民族と連帯してヨーロッパに対抗することを主張してゐる。

続いて、『興亞會報告』(第三集)に掲載された「日本條下論説」では、「制度文物」が整備される一方、「兵備貿易」に対する関心が低い現状を「食シテ衣ザル者」になぞらへ、「一朝風雨驟ニ至ラバ、コレ凍寒ニ患フ」と憂ひてゐる⁽⁶⁵⁾。さらに、日本の周囲に目を向け、露英仏のアジア進出を語り、一国の安危とアジア全域の安危が密接に関連してゐると論じ、「我邦ノ勇進シテ爲ス有ラバ、全疆胥^{みな}依頼スル所ヲ得テ、全疆已ニ安ンジテ、大洲コレ振興セン」と、日本の指導的役割を謳ひ上げる。

彌平は、会員の獲得にも奔走した。『興亞會報告』(第九集)掲載の「大坂興亞第二分會歴史」には、明治十三(一八八〇)年五月から⁽⁶⁷⁾「幹事總代ノ任ヲ帯ビテ上阪シ興亞分會ヲ神阪ノ兩地ニ置カントシ之ヲ神阪間ノ諸紳士ニ謀」り、「僅ニ一閱月ナラサルニ神港ノ會員三拾餘名阪地ノ會員四拾餘名ノ多キ」を得ると同時に、『興亞會大坂分會支那語學分校』の開設にも尽力したとある⁽⁶⁸⁾。

(四) 二足の草鞋

《興亞會》の活動は順調に展開した。会員数は、ベルシャヤトルコからの入会者を含めて、創立時の七七名から半年足らずの間に二七〇名を数へるやうになり⁽⁶⁹⁾、『興亞會支那語學校』では朝鮮語の教育も開始される。明治十四(一八八一年)七月には、宮中から千円が下賜された⁽⁷⁰⁾。

けれども、経済状況は厳しかつたやうで、明治十三(一八八〇)年十一月に「幹事ノ酬金ヲ停⁽⁷¹⁾」めることを余儀なくされ、彌平ら役員は個人負担さへ求められた⁽⁷²⁾。翌年四月、彌平は曾根などと共に同会の議員に選ばれたが、これは無⁽⁷³⁾

報酬であつた、め、福澤の縁故で早失仕有的「一八三七年八月―一九〇二年二月十八日」の《貿易会社》に就職したり、⁽⁷⁴⁾
内務省から分離されたばかりの農商務省に奉職したり、⁽⁷⁵⁾『支那總説』(全三冊)といふ啓蒙書を刊行「明治十四(一八八二)
年十二月」するなどして、糊口を凌いでゐたやうだ。因みに、同書は、Williams, Samuel, Wells [1814. 9. 22-1884. 2. 16]
の“The middle kingdom” (1884) を抄訳し、《興亞會》の会員である中村正直「一八三三年六月二十四日―一八九一年六
月七日」と重野安繹「二八二七年十月六日―一九一〇年十二月六日」の序文を付したもので、「維新後我が国に於ける支那
に關する著述の嚆矢の一」⁽⁷⁷⁾、「當時に於いては支那研究の資料として甚だ注目すべきもの」⁽⁷⁸⁾との高い評価を受けた。

その後、彌平はしばらく郷里に戻る。当人によれば、「天皇陛下東北地方御巡行の際小生一己人を以て御巡行に前
後して東北地方及び北海道に漫遊しその間窃かに帝都を移すに足るべきの地を探檢」⁽⁸⁰⁾し、その結果、陸奥湾を擁する
青森県・下北地方こそが好適地であると判断したのだといふ。なほ、先述の『亞細亞洲史論略』においても、彌平は
東京以北への遷都を主張してゐたやうである。⁽⁸¹⁾とりわけ、陸奥湾岸の大湊・小湊の「兩地は兵備海防運輸通商などの
諸点に於て最も要衝の地」であり、「大湊は軍港たるに適して小湊は通商市場たる可し」⁽⁸²⁾と考へた彌平は、明治十九
年冬頃より、弟(友之助)の協力を得て、小湊海岸(現・青森県東津軽郡平内町)の埋立築港を企図したといふ。⁽⁸³⁾なほ、
小湊海岸の開発は資力不足に加へて、既得權益を有する青森港との兼ね合ひが上手くゆかず成功しなかつたが、大湊
は海軍水雷部の設置「明治三十五年八月一日」以来、今日まで北日本における海上防衛の根拠地となつてをり、彌平の
構想は一定の現実性を有してゐたと評価すべきであらう。

帰京後の明治十五(一八八二)年七月、彌平は大蔵省准奏任御用掛を命ぜられた。⁽⁸⁴⁾折しも、大蔵卿・松方正義「二八
三六年二月二十五日―一八二四年七月二日」が財政再建を進めてをり、銀行局に配属された彌平は、⁽⁸⁵⁾《日本銀行》開設「明
治十五(一八八二)年十月九日」、「国立銀行条例」改正「明治十六(一八八三)年五月五日」、「兌換銀行券条例」制定「明治
十七(一八八四)年五月二十六日」などに関はつたと思はれる。それと同時に、《興亞會》の会合にも再び顔を出す。け

れども、アジアの復興を標榜しつゝも、「談論風発の社交機關⁽⁸⁶⁾」といふ性格を捨てきれぬ《興亞會》は、アジア諸國間の摩擦を克服する具体的方途を持ち得なかつた。「壬午事変」〔明治十五（一八八二）年七月〕へと發展する日清關係の緊迫化に伴ひ、例会への出席者は減り、《興亞會》の活動そのものが低調となる。遂には、主要事業の一つである《興亞會支那語學校》も《東京外国語學校》に譲渡されてしまふ〔明治十五（一八八二）年五月十四日〕。

明治十六（一八八三）年一月二十日、《興亞會》は《亞細亞協會》に名を改めた。日本人を中心とする組織が《興亞會》と名乗ることに対して、「在京支那の有力中に『小なる日本が興亞など、いふのは生意氣だ』と批評した者があつた爲め⁽⁸⁷⁾」といふ。なほ、改めて役員が定められ、議員に選出された彌平は、会計委員となつた。⁽⁸⁸⁾この頃、『支那總説』の続巻（全三冊）を刊行し、既刊分を併せて六冊を《亞細亞協會》に寄贈してゐる。⁽⁸⁹⁾

明治十七（一八八四）年四月、松方の知遇を得てゐた彌平は、《慶應義塾》仕込みの英語力を見込まれてか「國債局勤務御用有之米國へ派遣ヲ命セラレ⁽⁹²⁾」、五月三十日の船便でニューヨークに渡り、翌年の十月まで滞在した。⁽⁹³⁾残念ながら、用務の内容は詳らかにしない。なほ、『亞細亞協會報告』（第十五篇）は、四月二十一日に開かれた送別會の様子を以下のやうに記す。

……本月念一日ヲ以テ。懇親會及ビ議員會ヲ開ク。會員。金子彌平。近日將ニ美國ニ赴カントス。因テ并ニ離宴ヲ芝紅葉館ニ張ル。下午三點鐘（午後三時の意——引用者註）衆人來集シテ。吟哦談笑シ。或ヒハ別房ニテ毫ヲ揮フ有リ。酒酣。弦歌餘興ヲ助ク。中夜ニ至リ始メテ散ズ。⁽⁹⁵⁾

彌平の帰國後、《亞細亞協會》は歓迎の宴を開く〔十一月九日⁽⁹⁶⁾〕が、會の運営は難しくなつてゐた。前年十二月に朝鮮・京城で起つた甲申事變——金玉均ら「獨立党」のクーデター失敗——を契機として、日清關係がに悪化の一途をたどりつゝ、あつたせいである。日清兩國會員の相互不信を和らげるべく、清國駐日公使・徐承祖を名譽副會長に推し、副會長の渡邊は、明治十八（一八八五）年六月十七日に行はれた議員會に於いて、「宜シク日清韓三國ノ交リヲ敦クス

ベシ」、「輯睦ヲ保持スルノ道ハ貿易ヲ盛ニスルニ在リ」、「貿易ヲ盛大ニスルハ先ヅ彼此相知ルヲ要ス」といふ活動方針を示す。さらに、会員の末広重恭（鐵腸）「一八四九年二月二十一日〜一八九六年二月五日」は、「朝野新聞」上で非戦論を展開してゐた。その一方、井上角五郎「一八六〇年十月十八日〜一九三八年九月二十三日」のやうな「独立党」支持・対清強硬論を主張する者も存在し、会の意見はまとまらず、《亞細亞協會報告》の発行も間遠になる。

三、 転 身

(一) 下 野

彌平は、主税局酒税課に異動し「明治十八（一八八五）年十二月」、⁽⁹⁸⁾正七位に叙せられた「明治十九（一八八六）年五月」。⁽⁹⁹⁾明治二十一（一八八八）年二月二十日、彌平は宇佐美延枝「一八六四年二月二十八日〜一九一五年十月十三日」と結婚する。⁽¹⁰⁰⁾和歌山藩士・宇佐美興栄の妹であつた延枝は、東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）を卒業した後、金沢や東京（麻布英和女学校）で和漢文の教鞭を取つてゐた。⁽¹⁰¹⁾

良き伴侶を得て、生活は順調に進むかに思はれた。しかしながら、「明治二十年頃より蹉跎困難事多く志の如く成ら⁽¹⁰²⁾ず」と後に述懐するやうに、彌平自身は憂悶してをり、松方に次のやうな書簡を送つた後、大蔵省を退職「明治二十一年（一八八八）年十一月」するに至つた。⁽¹⁰³⁾

私儀過般申上候通り年既二三十にも相成り志の成るや成らざるや身の立と立たざるも実に此際の進退に有之且ツ私儀是迄支那等の事二関し冥々の中計畫し来候次第も有之候處時勢の変遷より百事齟齬旁々今日一身の目途を決し尙政府に出仕して犬馬の勞を尽す歟又は田圃に帰農して生涯無為無名の氏と為る歟一應年来の志事顛末事情

申上候上御指教相伺此際一身の進退相決度……⁽¹⁰⁴⁾

アジア復興運動に人生を賭けてきた青年は、壁に直面する。《亞細亞協會》は存続してゐた——明治三十三（一八九〇）年一月に《東亞同文會》と合併——が、第五篇（明治十九年五月三十日発行）以降の《亞細亞協會報告》は現存してをらず、その活動は停滞してゐたと思はれる。また、これまでの順調な昇進は彌平が有能であつたことを示すが、「純直にして至誠なる人材」との評もあり、官吏といふ職業に嫌気が差したのかも知れぬ。それからの数年間は、前述の小湊海岸開發事業および、旧知の品川や渡邊が組織した《國民協會》に参加した以外に——活動の記録は見当たらない。

明治二十七（一八九四）年七月二十五日に豊島沖海戦が勃発し、日清戦争が始まると、支那に関する豊富な知識を買はれてか、翌年三月に陸軍省の雇員（第一軍附）として、日本軍が占領したばかりの營口に赴くやう命ぜられる。營口は遼寧省を二分して流れる遼河の河港であり、イギリスによる満州貿易の中心地である。それからの約一年間、營口民政部で会計・稅務・民政の各課長を歴任したが、三国干渉によつて遼東半島を清国に還付することとなり、同年の十一月三十日に營口を去つた。

明治二十九（一八九六）年四月二十二日、彌平は台湾總督府民政局事務官に任ぜられ、新領土・台湾に向かふ。同地では、台湾県書記官心得を振出しに、財務課長、台湾県書記官、總督府国語伝習所長心得、淡水館幹事などを歴任し、台湾總督であつた乃木希典「一八四九年十一月十一日〜一九一二年九月十三日」を「扶けて肅正する所少な」⁽¹⁰⁵⁾くなかつたと伝へられる。

この頃、首相であつた松方から、彌平を故郷の岩手県知事に登用するといふ話も出たやうだが、明治三十一（一八九八）年一月十二日の松方内閣総辭職に伴ひ、この件は沙汰やみとなつたといふ。松方に殉じたのだらうか、勲七等瑞寶章を受けた（明治三十年十二月二十八日）直後の明治三十一（一八九八）年一月十五日に台湾總督府を辭し、二度と

官職に就くことはなかつた。

(二) 国士的事業者

野に下つた彌平は、大阪に居を移した。《興亞會》草創期に勧誘活動をした大阪には、知人も多かつたのだらう。大阪商法会議所（現・大阪商工会議所）の初代会頭などを務めた五代友厚「二八三五年十二月二十六日〜一八八五年九月二十五日」は、《大阪興亞第二分會》でも主導的役割を担ひ、彌平と親しかつたといふ。⁽¹⁴⁾この時、既に五代は世を去つてゐたが、五代を繼いで商法会議所の会頭に就任した藤田傳三郎「二八四一年五月十二日〜一九一二年三月三十日」や、その甥である久原房之助「二八六九年六月四日〜一九六五年一月二十九日」などとも親交があつた。さらに、松方正義の三男である幸次郎「二八六六年一月十七日〜一九五〇年六月二十四日」が、神戸に本社を置く川崎造船所（現・川崎重工業）の社長を務めてゐたことも、移住を決めた一つの理由であらう。

彌平は、「支那保全」か「支那分割」かといふ机上の政論に興味を持たなかつた。『東亞同文會第二三回報告』所収の「北清漫遊所感」において、次のやうに述べてゐる。

私の愚考に依りますと兎に角何を爲るに就ても支那と親んで往かなければならない、⁽¹⁵⁾縱令保全をするにしても、分割をするにしても、能く彼の事情を知り、又彼と種々様々の事に於て利害を共にしてやらなければならぬといふ所から第一には資本の合同と云ふことをしたいものである。⁽¹⁶⁾

日支の実質的（経済的）な結合を重視する彌平は、明治三十二（一八九九）年から支那において事業を始めた。⁽¹⁶⁾「先づ天津に企業を試み」、弟たち（友之助・倉之助）と牛莊（營口）に《金福洋行》といふ貿易会社を起こした。「本邦ヨリ綿布及雜貨類ヲ輸出シ彼地ヨリハ大豆大豆粕大豆油等ヲ輸入シ」、「本邦ニ於テハ資本ヲ供給シテ業務ノ発達ヲ帮助致具レ候者之レアリ又彼地ニ於テハ弊行業務ノ確實ナルヲ信據シテ信用上ノ取引ヲ為シ具レ候者モ少ナカラス資本ノ

微々タルニ拘ラス營業上取扱商品ノ金額ハ其資本ノ割合ニ比シテ較々巨額ニ上ルノ實蹟ヲ呈シ来リ前途實ニ有望ノ至リト窃ニ欣喜⁽¹⁸⁾する状況であつたといふ。だが、同年の末から義和団の活動が激しくなり、明治三十三年（一九〇〇）年の五月下旬には、「牛莊モ危害切迫シ在留本邦商民ハ拳ケテ義勇隊ヲ組織シ義和団來襲⁽¹⁹⁾」に備へざるを得ない状況に陥り、その後も、「全く魯國占領の實を呈して税關も魯國の國旗を掲げ市内の民政も魯國官吏の施爲⁽²⁰⁾に帰⁽²⁰⁾」す状況が続き、二万円弱の損害を蒙つたといふ。

《亞細亞協會》が《東亞同文會》と合併したことに伴ひ——《東亞同文會》の會員となつた彌平は、『東亞同文會第一〇回報告』に寄せた「滿州視察談」の中で、滿州に対して日本人が無関心であることを痛嘆してゐる。

我邦人の彼土（＝滿州——引用者補足）の事情に暗きに比して露人の之れに精通するは亦驚くに堪へたり……之れ露と滿州とは相接壤し古來國際的交渉頻繁なりしにも由るべしと雖とも其志の小ならざるに基因せるは余輩の確信する所なり

我國民にして東亞經綸に志なくんは即ち止む苟もこゝに志あらんか滿州の事情には既にく知悉する所なかるべからざりしなり、然るにその智識に於て日露の精粗此の如し豈寒心せざるべけんや、⁽²²⁾

その上で、滿州には、豊富な農作物——大豆・藍靛・粟・高粱・玉蜀黍——やその加工品に加へて、木材や鉱物などの資源が存在することを指摘し、その開發が急務なることを説いて倦まない。

要之滿州に於ける現在の富を利用し又その隠れたる富を開發するは我に取りて無限の利益たるのみならず自ら進んで之れか經綸に従事するか如きは東亞百年の大計上日本の將に任せざるべからざる所なり露人の舉動は敏活にして其識見遠大なり滿州に於ける計營亦必ず深きものあらん然れと滿州は東亞の咽喉也咽喉にして危險に濱せんか東亞の事亦た言ふに忍びざるに至らん試に近來露の滿州に於ける舉作如何を見よ鐵道人民保護の名に於て滿州の各要地を盡く占領し居るにあらすや東亞經綸に志あるもの豈徒に觀すへけや東亞同文會の如きは此際天下に

先ち大に劃策する所あらずんばあらざるなり⁽¹²⁴⁾

日露戦争が勃発する「明治三十七（一九〇四）年二月」と、彌平は事業の本拠を安東（現・丹東）に移した。安東は、朝鮮半島北部の新義州と鴨緑江を挟んで向かひ合ふ要衝である。加へて、日本軍により満州の奉天とを結ぶ安奉鐵道が建設中であり、その重要性は高まつてゐた。彌平は、予て昵懇であつた同地軍政委員の陸軍大尉・大原武慶「一八六五年六月〜一九三三年一月二十四日」の「助力を得て鴨緑江上流の木筏流下を目論み、相當の成績を擧げ」たり、「高粱酒醸造に着手」⁽¹²⁵⁾する一方、中野二郎「一八六四年〜一九二七年二月十四日」と起業計画を立てたといふ。また、明治三十七（一九〇四）年九月三十日には、安東県市政準備委員長を委嘱され、「大規模の新市街計畫を建て」⁽¹²⁷⁾《安東同仁醫院》⁽¹²⁸⁾の運営に尽力するなど、同地の基礎を築いた。その他、黄金沢金山（岩手県）や真木鉞山（秋田県）など幾つかの鉞山経営にも関与する。

明治三十七年頃には、大阪から京都に転居した。御幸町竹屋町上ルに新築された邸宅は敷地四百坪という広大なものであり、当時の資産総額は二〇万円ないし三〇万円ぐらいであつたといふ。⁽¹²⁹⁾

四、発心

(一) 弟・謹三の死と智學との出会い

積極的に事業を展開しながらも、彌平は満足できなかつた。彼自身、「明治二十年頃より今日まで約二〇年は小生の最も憂苦艱難して非運逆境に處し來たる期間」⁽¹³⁾と、後に振り返つてゐる。

かうした逆境の中、彌平を勇氣づけてゐたのは、弟・謹三「一八六四年十月十日〜一八九五年五月十五日」であつた。

小学生時代から優等生の誉れ高く、兄と同じ《慶応義塾》⁽¹³²⁾に籍を置き、兄の渡米に随行した謹三は、同地でキリスト教の洗礼を受け、神学を本格的に学んだ。「同人は兼ねて東洋宗教の革命をなさん願望を有し居り小生とは素より骨肉の信頼あるのみならず意氣の投合ありて小生の最も信頼いたし居候」⁽¹³⁴⁾、「勿論故謹三は骨肉の名に於いてこそ小生の弟なれ共天稟性格思想學問等の實に於いては全く兄たるの資に乏しからず素より小生の及ばざる所小生は常に同人を見ること兄の如く畏敬の念を呈し居たる」といふ彌平の評価を見るならば、この弟に対する彼の信頼感が並々ならぬものであつたことは、容易に想像がつく。

だが、謹三は、押川方義「一八五〇年十二月十六日〜一九二八年一月十日」が仙台に設立した東北学院に、神学部教授（旧約学）として赴任することが決まつてゐながら、結核のために米国で短い生涯を閉ぢる。⁽¹³⁶⁾「此時小生の失望落胆心中の煩悶懊惱今こゝに筆紙に盡しがたく嗟乎我が事終れり天遂に我を捨てたりとまで嘆息いたし候」⁽¹³⁷⁾と、彌平は後に語つてゐる。

さうした苦惱の最中、彌平は、田中智學「一八六一年十一月十三日〜一九三九年十一月十七日」の著書『宗門之維新』に巡り合ふ。明治四十（一九〇七）年四月のことである。彌平にとつて、その内容は、「實に小生をして盲龜の浮木死中に活路を得たるの思あらしむる」⁽¹³⁸⁾ものだつた。

(二) 『宗門之維新』を巡つて

金子家の宗旨は浄土宗であつたし、彌平の周囲には、謹三を始め、押川⁽¹³⁹⁾や日本救世軍司令官の山室軍平「一八七二年九月二十二日〜一九四〇年三月十三日」⁽¹⁴⁰⁾など、キリスト者が少なくなかつた。にもかゝらず、彌平が智學の「日蓮主義」を選んだのは、智學が「『日本』の世界史的使命」を高らかに謳ひ上げたからだらう。智學の「日蓮主義」は、日蓮教学の見地から、「日本」に特別な意義を与へるものであつた。

聖祖は、正しく世界統一軍の大元帥也、大日本帝國は正しく其大本營也、日本國民は其天兵也、……本化妙宗の日本國教奠定は、完くその出征準備也、日本國は正しく宇内を靈的に統一すべき天職を有す、法は日本と日本ならざるとを問はざれども、教は特に日本を認めざるべからず、日本をして宇内を統一せしめざるべからず、日本をして終に永く宇宙人類の靈的巨鎮たらしめざるべからざる也、其は宇内の覺醒の爲に！ 人類を救はんが爲に！⁽⁴¹⁾

《興亞會》時代から、アジア復興における「日本」の指導的役割を高調してきた彌平は、アジア主義者であると同時に熱烈な愛国者であつた。けれども、北清事変や日露戦争について、「結果や小生の豫期に齟齬して云ふに忍びざるものあり又何ぞ東西歸一の大局に於て大なる裨益と大なる發展を見る事を得んや、實に慚愧如何千萬の至りに候」と恥ぢ、「今更に鳥根々性ふり廻はし大國民の顔なけかし⁽⁴²⁾ぞ」と詠ふ彌平は、「大國意識」に安住してゐるわけではない。彌平は、「東洋西洋を打て一丸と爲し政治的に之を統一する」ことを「我が大和民族の天職⁽⁴³⁾」と信じてゐた。彌平は、かく述べる。

元來小生の東西歸一は政治的に之を為さんとし宗教の如きも只之を爲すが爲めの一方便一手段として之を用るの意に過ぎず即ち政治的は主にして宗教的は従なりとの考に御座候小生曾て想ふにマホメットは西域に興りて東西を統一せんとしたる者又成吉斯汗は東部に興りて東西を統一せんとしたる者均しく皆武力即ち政治を以て本據とし宗教は其方便手段として之を用ひたるのみマホメットの回々教に於る成吉斯汗の頼麻教に於る是れなり政治的主にして宗教的の従なる已に斯の如き例あり以て則るべしと是れ小生二十餘年來抱示したる意見又歩み來りたる進路にて御座候⁽⁴⁴⁾

「宗教」は人生の「意義」・「目的」を示すものであり、「政治」はそれを実現する「手段」に過ぎぬと考へるなら、こゝに示された発想は顛倒してゐると云はざるを得ない。とは云へ、彌平の願ひが「政治」的に實現されて来たならば、

そのやうな顛倒は問題とならなかつたであらう。けれども、彌平の期待を裏切り続ける「政治」的現実が、その顛倒を彌平に直視することを強ひたのである。そして、彌平は、「日蓮主義」を選び取ることで、この顛倒を克服した。

小生は實に誤り候小生は實に主従の分を誤り候小生已に此過誤あり今日に至りて天を呼ばんとするの窮に遭ふも抑も亦自業自得自然の結果ならん歎然れども今此過誤を改め主従の分を正して老師の所謂宗教的に世界の統一を謀らば小生の志願も亦自から其間に成就せらるゝの時あらん小生は斯く思ひ斯く思ひ來たりて脱然として闇黒を出て前途に一大光明の在るあるを發見するに至りたる⁽¹⁴⁶⁾

その上、「宗門之維新」は、日蓮教学の次元で日本の「世界史的使命」を示して事足れりといふ書物ではない。さうならば、事業家である彌平の心を捉へはしなかつたらう。同書には、日蓮門下教団の刷新に始まり、本山鉄道、宗設義勇艦隊、果ては宗立殖民地に至る、「世界史的使命」を実現するための壮大な事業計画が示されてゐた。

(三) 日蓮主義を奉じて

明治四十(一九〇七)年五月二十一日に鎌倉・要山の智學を訪ねた彌平は、「日蓮主義の大信者大奉行者」⁽¹⁴⁷⁾として活動を始め、「天性の純正至直の資質、いよくその純を加へ」⁽¹⁴⁸⁾る。ちやうど、「日蓮主義の黄金時代」⁽¹⁴⁹⁾(大谷栄一)とも評される時期であつた。『妙宗』「第一卷第七号・明治四十一年七月」の「妙宗誌友會」欄(各地読者会の報告)は、五月二十八日の京都妙宗誌友會に彌平が初参加した様子を伝へてゐる。

爰に特記すべきは、曾て「妙宗」誌上にその名を承り得たる金子彌平氏の參會されしことなり、⁽¹⁵⁰⁾氏の眞摯なる信歴談は吾人の頭腦に大なる感動を與へたり、⁽¹⁵¹⁾實弟を亡はれし時の失望と「宗門の維新」に覺醒されし時の悦びは言句の間に漏れて、思はず襟を正さしめぬ⁽¹⁵²⁾

明くる明治四十二(一九〇九)年十一月三日に開催された「京都妙宗誌友會五週年紀念祝賀會」では、彌平が「妙宗

誌友會總代」として「祝章」を述べる。⁽¹⁵¹⁾ 早くも、彌平は「京都妙宗誌友會」の重鎮となつてゐた。大正三（一九一四）年十一月三日、智學が各地の門徒団体を《國柱會》に再編した際、彌平は《國柱會》京都局の初代局長に選ばれる。「大正四（一九一五）年三月二十二日」。⁽¹⁵²⁾ また、智學の三男で、日蓮主義國体論の理論家として知られる里見岸雄「二八九七年三月十七日〜一九七四年四月十八日」も、若き日に彌平の世話になつたといふ。⁽¹⁵³⁾

彌平は、明治四十二（一九〇九）年一月十五日に結成された《天晴會》とも關係を持つた。⁽¹⁵⁴⁾ これは、智學と並ぶ「日蓮主義」の鼓吹者であつた《顯本法華宗》の本多日生「二八六七年三月十三日〜一九三一年三月十六日」の発案により、「日蓮主義」に賛同する社会的名士を糾合したものである。智學を始め、「天皇本尊論」を唱へる《唯一佛壇教團》の清水梁山「二八六五〜一九二八年」や、姉崎正治「二八七八年七月二十五日〜一九四九年七月二十三日」、小笠原長生「二八六七年十一月二十日〜一九五八年九月二十日」、幸田露伴「二八五七年七月二十三日〜一九四七年七月三十日」、佐藤鐵太郎「二八六六年七月十三日〜一九四二年三月四日」、松岡静雄「二八七八年五月一日〜一九三六年五月二十三日」、三宅雪嶺「二八六〇年五月十九日〜一九四五年十一月二十六日」、村上浪六「二八六五年十一月一日〜一九四四年十二月一日」なども名を連ねてをり、《京都天晴會》を始め全国各地に支部を有した。

明治四十三（一九一〇）年四月三日から五日間、京都市寺町二条の妙満寺で行はれた「京都天晴會春期講習會」の科外講師陣（河上肇、蘭田宗恵、内藤湖南、上田敏、松本郡太郎、島文次郎）を見れば、《京都天晴會》の社会的影響力が窺へよう。因みに、同郷（旧南部藩）の出身であると共に、支那問題といふ共通する関心もあつたせいか、内藤湖南「二八六六年八月十七日〜一九三四年六月二十六日」と彌平との親交は一〇年以上も前から続いてゐた。⁽¹⁵⁵⁾

明治天皇の崩御「明治四十五（一九一二）年七月三十日」は、彌平に大きな衝撃を与へる。「國柱新聞」「大正元年八月二十一日」掲載の公開書簡・「甥某に與ふ」の一節を引かう。

近年我国上下臣民は驕慢虚偽邪惡の境界に入るの情勢あれば此の際先帝陛下の御登遐は我国上下臣民に一大警

戒を垂れ、その一大覺醒を促せ給ふ不可思議なる神秘的御一大事の神隠れには在しませずや、思ふてこゝに至らば我国上下臣民は必ず如何に處斷行動して在天の我 天皇陛下の御神靈に謝し奉るべき歟の一大問題に到達すべし、而してこの一大問題の解決は他なし、上下臣民あらゆる階級に在る者、自覺自省して驕慢虚偽邪惡の境涯を脱却し、こゝろを改め行を正ふし各自其の職分職業に應じ、甚大深厚の信念を以て 先帝陛下の御聖旨を奉持奉行し、これを以て 今上陛下大統繼承皇猷振作の御盛時に報ひ奉らん一途是而已⁽¹⁵⁷⁾。

大正元(一九一二年)九月十三日の明治天皇大葬当日、乃木希典が妻・静子と共に殉死する。《國柱會》では、彌平と——彌平の委嘱により、かつて乃木に「日蓮主義」を説いた⁽¹⁵⁷⁾——智學の高弟・山川智應「二八七九年三月十六日〜一九五六年六月二日」を請願主(施主)として、「乃木大將追弔大法會」を挙行(大正元年九月二十四日)し、⁽¹⁵⁸⁾その忠魂を慰靈したのであつた。

五、老いてなほ

(一) 《亞細亞義會》など

「支那問題に奔走する有志家を援助し、革命黨關係の志士等が官憲の追究を受けて難を京都に避ける如き場合は之を自宅に収容して親切に庇護⁽¹⁵⁹⁾」したといふ彌平は、《亞細亞義會》の評議員でもあつた。同会は、来日中のイスラム教徒タタール人、アブデュルレシト・イブラヒムと親交を持つた大原武慶や中野常太郎(天心)「一八六九三年十月二十三日〜一九二八年二月二十日」らによつて、明治四十三(一九一〇)年六月七日に結成されたアジア主義団体である。同会の機関誌『大東』に収録された「亞細亞義會設立主意」は、衰運の極にあるアジアの現状を嘆き、「共通セル良風美

俗精神性格」を基調とした「亞洲ノ改善向上」の必要性を謳ひ上げてゐる。⁽¹⁰⁾ 他のアジア主義団体と比較して注目すべきは、イブラヒムの存在ゆゑ、イスラム世界との関わりが深かつた点である。イブラヒムの日本滞在記「ジャボンヤ」によれば、大原は「日本人で最初にイスラムに改宗した人物」であり、『大東』には、日本人初のメッカ巡礼を果たした山岡光太郎「一八八〇年三月七日〜一九五九年九月」（紅洋生）による「メッカ巡禮記」が連載されてゐた。

同会の発起人は、大原・中野のほか、青柳勝敏「一九七九年五月九日〜一九三四年九月七日」、犬養毅「一八五五年四月二十日〜一九三二年五月十五日」、河野廣中「一八四九年七月七日〜一九三三年十二月二十九日」、頭山満「一八五五年四月十二日〜一九四四年十月五日」、山田喜之助「一八五九年六月〜一九三三年二月二十日」であり、この七人は幹事でもあつた。（明治四四年十月からは、中野貴太郎「生没年不詳」と中野二郎を加へ、幹事は九人となる。）彌平が参加した経緯は定かではないが、親交の厚かつた大原（三章二節参照）の勸奨であらう。また、犬養が彌平を孫文に紹介する書状が現存するなど、彌平と犬養の關係も浅からぬものであつた。

武昌蜂起「一九一一年十月十日」を契機として辛亥革命が勃発すると、彌平はしばしば上京し、在京の幹事らと情報を交換してゐる。⁽¹⁰²⁾ なお、『大東』「第五年第四号・明治四五年四月号」には、「來翰」として、彌平の辛亥革命評が掲載されてゐる。そこでは、「支那時局今日の現状は當初革命黨の擧兵したる趣旨希望に相違して其名は革命なれとも其實は篡奪にして所謂革命軍なるものは篡奪者の踏台に爲りたるに過ぎず⁽¹⁰³⁾」と、袁世凱の大總統就任を批判し、さらに「熱誠なき輕佻浮薄の革命が出来損ひと爲りて篡奪の惡結果を生じたるものと謂ふべき乎⁽¹⁰⁴⁾」と酷評し、支那の真正なる革命は前途遼遠であると慨嘆して止まない。

その他、『亞細亞義會』のほか、『大日本』の発行元たる『大日本社』の社友でもあつたことが、『大日本』（大正七年八月号）掲載の「社友（及高讀者）各位名簿」から知られる。⁽¹⁰⁵⁾ 同誌は、「大日本主義」を標榜し、その編輯には若き日の満川龜太郎「一八八八年一月十八日〜一九三六年五月十二日」らが携はつてゐた。

晩年は、事業を人に譲り、「超然たる高士の態度を持し、東山隠士として、……吟詠に自適し、諸名士に會して、清談を交ふるを樂しみと⁽¹⁶⁶⁾」た。「吟詠」については、前述の『大東』及び、智學主宰の諸誌に少なからぬ漢詩を寄せてゐる。和歌に着想を得た変則的な詩形(五七七七七)を有する「東山調」と稱するものから、數篇を引いておかう。その詩風は、「俠骨の稜々たる⁽¹⁶⁷⁾」との人物評を反映してか、雄渾なものである。

厩皇子

偉哉厩皇子。立憲章兮上下恃。文化乃興矣。儒取正義佛妙理。調和之術濟國美。⁽¹⁶⁸⁾

我有向上性

我有向上性 滅不善兮絶不正 自知念力勁 真文明兮大平和 到達彼岸是使命⁽¹⁶⁹⁾

相共好

酒戰相共好 連敗何妨玉山倒 但恨停杯早 落日醉顏各自紅 君如春花僕秋楓⁽¹⁷⁰⁾

大正十二(一九三三)年九月一日の関東大震災に際しては、「自ら晏居するに堪へずとし、ひそかに松方公、山本(権兵衛・首相——引用者補足)伯等に往復して、何事か獻替するところあらんとせしも、虎の門事件(大正十二年十二月二十七日——引用者補足)突如として起り、内閣の更迭に⁽¹⁷¹⁾遇」つた、め、為すところなく終つたといふ。

その後、東京滞在中の大正十三(一九二四)年二月十七日、女婿・宮崎虎一方にて六九年の生涯を閉ぢる。國柱會館にて行はれた告別式には、松方巖(松方正義代理)、山根武亮(陸軍中将)、鎌田栄吉(慶應義塾元塾長)、佐藤阜藏、木内重四郎(貴族院議員)、押川方義、内田良平などが参列したといふ。⁽¹⁷²⁾法名は「東山院英光日毫居士」、遺骨は東京・江戸川区の《國柱會》本部内「妙宗大靈廟」に現在も安置されてゐる。

を は り に

彌平は、「典型的な明治ナショナリスト」であつた。《興亞會》における奔走、官吏としての精勵、事業家としての活躍。彼の内部では、「個人としての意欲」と「国家としての繁栄」とが、矛盾なく結び付いてゐた。福澤の「一身獨立して一國獨立する」⁽¹³⁾といふ教へを忠実に守つてゐたと評すことができる。しかし、日露戦争を一つの契機として、「個人」と「国家」とは次第に乖離し始める。両者の再統合を願つた彌平は、智學の「日蓮主義」に辿り着く。それは、「国家」の理想を説くと共に、その実現を期す運動と関はる「個人」にも存在意義を与へるものであつた。

その上、英語と支那語を自在に操る彼の視野は、海外にも広がつてゐた。とりわけ、《亞細亞義會》への参加に象徴される——イスラム圏への関心は注視すべきである。《興亞會》にもイスラム諸国からの入会者が存在したし、彌平自身もマホメットに関する言及（四章二節参照）を残してゐるから、持続的に関心を持ち続けたことが想像される。

史料的には、相手側の文書に記述が少なかつたため、彌平側の文書に頼らざるを得なかつた。そのため、伝記としての精確さに若干の不安が残る。また、血族ゆゑの買ひ被りもあらう。筆者は友之助の曾孫である。これらについては、読者の御批正を待ちたいと思ふ。

註 引用に際しては、原文通りとしたが、一部の合字を現行のものに改めた。

(1) 福澤諭吉「金子彌平宛書翰集序」(明治三十年十月二十七日筆)。「福澤諭吉全集」第一九卷(岩波書店、昭和四十四年四月)七七四頁。

(2) 『朝日日本歴史人物事典』(朝日新聞社、一九九四年十一月)四五二頁。

(3) 山川傳之助「東山金子彌平氏を弔す」。以下、「弔す」(『天業民報』大正十三年四月十二日)。

- (4) 『岩手県姓氏歴史人物大辞典』(角川書店、平成十年五月) 六〇〇頁。
- (5) 『花巻市史』近世編一(昭和四十七年二月) 一〇九頁。
- (6) 甲良山『東講商人鑑』(安政二年) 六丁。
- (7) 「金子彌平君ノ傳」。以下、「彌平君ノ傳」。村上繁次郎『岩手縣國會議員列傳』。以下、「列傳」(哲進堂、明治二十二年) 一七頁。
- (8) 「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。
- (9) 「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。
- (10) 「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。
- (11) 「照井一宅」竹林貫一『漢學者傳記集成』。以下、「集成」(関書店、昭和三年五月) 一一二二頁。
- (12) 「照井一宅」『集成』一一二二頁。
- (13) 「照井一宅」『集成』一一二二頁。
- (14) 「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。
- (15) 福澤研究センター『慶應義塾入社帳』第一卷(慶應義塾、昭和六十一年三月) 六〇二頁。
- (16) 「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。
- (17) 村井保固宛福澤諭吉書簡(明治十七年五月廿七日)。「福澤諭吉書簡集」。以下、「書簡集」第四卷(岩波書店、二〇〇一年八月) 一四八頁。
- (18) 「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。
- (19) 『慶應義塾学業勤怠表』参照。
- (20) 「勤怠表」は、当時の成績表であり、慶應義塾大学に現存する。
山川「甲す」。
- (21) なほ、「盛岡三秀才」の残る一名は不明である。御存知の方は、御教示願ひたい。
「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。

- (22) 「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。
- (23) 金子彌平「信念の聲」(『妙宗』明治四十年七月号)一三二頁。
これは、彌平が田中智學に送つた書簡が、智學の率ゐる《立正安國會》の機関誌『妙宗』に転載したものである。
- (24) 福澤「亞細亞諸國との和戦は我が榮辱に關するなきの説」(『郵便報知新聞』明治八年十月七日)、『福澤諭吉全集』第二〇卷、一五〇頁。
- (25) 同右、一五一頁。
- (26) 「南部次郎君」『對支回顧録』。以下、『回顧録』下卷(原書房、「明治百年叢書」、昭和四十三年六月復刻)一〇八頁。
- (27) 「南部次郎君」『回顧録』下卷、一〇八一—一〇九頁。
- (28) 「彌平君ノ傳」『列傳』一七頁。
- (29) 「彌平君ノ傳」『列傳』一八頁。
- (30) 西南戦争当時の鹿児島県第一課長で、薩軍に協力したとして捕縛された兄・宏「一八三五—一八七八年」と私塾を開いてゐた。
- (31) 「彌平君ノ傳」『列傳』一八頁。
- (32) 山川「弔す」。
- (33) 「彌平君ノ傳」『列傳』一八頁。
- (34) 「南部次郎君」『回顧録』下卷、一〇九頁。
- (35) 彌平自筆の「履歷書」(明治二十九年三月筆)。
この「履歷書」は、「臺北縣」の公用箋に楷書体で書かれてをり、台湾総督府か台湾県に提出した書類(の写し)と思はれる。以後、彌平の官歴は、この「履歷書」による。だが、明白に誤記と判断される場合は、この限りではない。
なほ、『回顧録』の「金子彌平君」には、「明治九年九月二十六日付を以て清國公使館附通辯見習申付られ」(二〇二頁)とある。
- (36) 「彌平君ノ傳」『列傳』一八頁。

黒龍會が編纂した『東亞先覺志士記傳』。以下、『記傳』下卷（原書房「明治百年叢書」、昭和四十一年六月復刻）の「列傳」・「金子彌平」には、「明治八年森有禮が駐清公使として北京に赴任する際伴はれて支那に渡つた。」（二三五頁）とあるが、その他の史料と整合しない。森は、明治九年五月に一度帰朝し、十月に再び渡支してゐる。彌平を随行したのは、この折ではないだらうか。

(37) 「南部次郎」『日本近現代人物履歴事典』。以下、『事典』。（東京大学出版会、二〇〇二年五月）三三三頁。

『回顧録』下巻の列傳「南部次郎君」は、東の渡清時期を明治十三年六月と記すが、その他の史料に整合しないどころか、同傳中に「居ること一年餘にして十三年七月五日歸朝命令に接し」（二一〇頁）とあり、單なる誤記であらう。ゆゑに、前掲『事典』に拠つた。

(38) 「南部次郎君」『回顧録』下巻、一〇九頁。

(39) 「南部次郎君」『回顧録』下巻、一〇九頁。

(40) 兼良の母・コトは、有禮の異母姉であり、伊集院新六に嫁した。

『回顧録』下巻の列傳「伊集院兼良」には、「明治十一年三月森有禮公使に識用されて北京公使館附通辯見習となり、十三年七月之を辭し」（一九七―一九八頁）とある。

(41) 「南部次郎君」『回顧録』下巻、一〇九頁。

(42) 「金子彌平」『記傳』下巻、二三五―二三六頁。

(43) 「道聽途説」『慶應義塾百年史』付録（慶應義塾、昭和四十四年三月）二二九頁。

右記史料には、「二ヶ月ノ休暇」とあり、「彌平君ノ傳」には、「明治十三年春清國ヨリ歸國」（一八頁）、前出「履歴書」には、「同（明治）引用者補足 十三年十二月帰朝」とあり、記述が一致しない。だが、『官員録』にも、明治十三年三月以降の記載が見へると、明治十三年の早い時期に帰国してゐなければならぬ。また、『官員録』にも、明治十三年三月以降の記載が見られない。よつて、明治十二年十二月に一時帰国したが、『興亞會』の活動を始めたため、再度の渡清を諦めたと推測するのが妥当であり、「履歴書」は誤記と思はれる。

(44) 「興亞會創立ノ歴史」（草間時福朗読）『興亞公報』第一輯（明治十三年三月廿四日）四頁。

以下、『興亞公報』(第二輯より『興亞會報告』と改題)及び『亞細亞協會報告』は、黒木彬文・鱒沢彰夫編『興亜會報告・亜細亞協會報告』。以下、『報告』(不二出版、一九九三年)に拠るが、復刻版書名は略し、該号の頁数を示す。引用に際し、漢文は訓読した。以後も同様。

(45) 「紀事」『亞細亞協會報告』第五篇(明治十六年六月十六日)二頁。

(46) 「會根俊虎君」『回顧録』下巻、二九九頁。

(47) 「興亞會創立ノ歴史」『興亞公報』第一輯、五頁。

(48) 福澤研究センター『慶應義塾入社帳』第一巻。

(49) 「興亞會創立ノ歴史」『興亞公報』第一輯、五頁。

なほ、「本會記事」『興亜會報告』第三集(明治十三年四月廿一日)によれば、四月十日に行はれた第二会同において、彌平は四十票の最高得票数を以て幹事に再選された。(三十四頁)。

(50) 三月一日に正副会長及び幹事が集まり、「興亞會規則」を正式に制定した。

(51) 『興亞公報』第一輯、一頁。

(52) 『興亞公報』第一輯、二二三頁。

(53) 「渡邊洪基演説」『興亞公報』第一輯、七七八頁。

(54) 「渡邊洪基演説」『興亞公報』第一輯、九頁。

(55) 「渡邊洪基演説」『興亞公報』第一輯、一〇頁。

(56) 「興亞會規則」第一条に、「本會ハ亞細亞諸邦ノ形勢事情ヲ講究シ并セテ言語文章ノ學ヲ習修スルヲ以テ其事業ノ目的トスル」と明記されてゐることからも、語学教育を重視してゐたことが窺へよう。

(57) 「雜件」『興亞會報告』第二集(明治十三年四月一日)二二—二三頁。

なほ、鱒沢彰夫は、『興亞會支那語學校』で用ゐられた『新校語言自選集 散語ノ部』(慶應義塾出版社、明治十三年四月)の編輯に彌平が関はつてゐた可能性を示唆する。詳しくは、鱒沢『興亜會報告・亜細亞協會報告』解説(2)「興亜會の中国語教育」『報告』下巻を参照されたい。

- (58) 『慶應義塾』上巻(昭和三十三年十一月)五九三頁。
 同書には、「約一年ばかりで辞任」とあるが、明治十三年五月から一ヶ月半ほど大阪に滞在してゐる(本文参照)から、もつと早く辞めたのではないか。
- (59) 『編者識』『興亞會報告』第二集、一〇頁。
- (60) 『彌平君ノ傳』は、「亞細亞洲誌論略中附記興亞殖民論等ノ如キニ至リテハ期スル所遠大ニシテ其論着實徒ラニ大言人ヲ驚カシムルノ比ニ非ス以テ君カ平生ノ抱負才識ノ非凡ナルヲ徴スルニ足ル」(『列傳』一九頁)と評してゐる。
 狭間直樹によれば、『興亞會報告』に抄録された一連の文章は、「中国人の手になる最初期の政論新聞」である『循環日報』に転載され、「其の識見の卓、立説の精、空言補する無きものの同日にして語るべきものに非ず」との絶賛を受けたといふ。詳しくは、狭間「初期アジア主義に関する史的考察(4)・興亞會について(統)——中国側の反応——」『東亜』(二〇〇一年十一月号)八四頁を参照されたい。
- (61) 金子彌平「亞細亞洲總論論說」『興亞會報告』第二集、一一—一二頁。
- (62) 金子彌平「亞細亞洲總論論說」『興亞會報告』第二集、一二頁。
- (63) 金子彌平「亞細亞洲總論論說」『興亞會報告』第二集、一三頁。
- (64) 金子彌平「亞細亞洲總論論說」『興亞會報告』第二集、一三頁。
- (65) 金子彌平「亞細亞洲誌論畧日本條下論說」『興亞會報告』第三集、一〇頁。
- (66) 金子彌平「亞細亞洲誌論畧日本條下論說」『興亞會報告』第三集、一一頁。
- (67) 「廣告」『興亞會報告』第八集(明治十三年七月廿九日)には、「本月一日ヲ以テ帰京仕候」(二四頁)とある。
- (68) 「大坂興亞第二分會歴史」『興亞會報告』第九集(明治十三年八月廿四日)二頁。
- (69) 黒木彬文「興亞會報告・亞細亞協會報告」解説(1)。「興亞會・亞細亞協會の活動と思想」『報告』上巻、七頁参照。
- (70) 「宮島誠一郎」『回顧録』下巻、一四六四頁。
- (71) 「本會記事」『興亞會報告』第拾貳集(明治十三年十一月十五日)二頁。
- (72) 「本會記事」『興亞會報告』第一六集、二頁。
 彌平は、一二円の負担を求められてゐる。

(73) 「本會記事」『興亞會報告』第一六集、四頁。

(74) 『書簡集』第九卷(二〇〇三年一月)所収の早矢仕有的宛福澤諭吉書簡(明治十四年カ九月四日)には、「陳は金子彌兵衛衛、当夏以来様々存立候事業も有之、彼はいたし候中、一度帰国、此度東上。今後之如何卒貿易商会ニ入り、働を呈し度との志願。」(二四七―二四八頁)とある。『書簡集』の編者は、『慶應義塾』上巻(五九三頁)の記述を根拠に執筆年代を明治十四年と推定するが、註(57)において指摘した通り、筆者自身は、『慶應義塾』の記述に疑ひを持つてゐる。加へて、『興亞會報告』第九集(明治十三年八月廿四日)には、「幹事金子彌兵衛君ハ病氣保養ノ爲メ歸郷仕候也」(二三頁)とある。文中の「当夏以来様々存立候事業」を『興亞會』の活動と解釈し、本稿では明治十三年と推定して置く。

(75) 「彌平君ノ傳」『列傳』一九一―二〇頁。

右記「彌平君ノ傳」には、「明治十四年春君農商務省御用掛ト爲ル職ヲ奉スルコト 數月遂ニ之ヲ辭ス」とある。また、前出「履歴書」には、明治十四年二月から四月まで、農商務省准判任御用掛として、農商務局に勤務したと記されてゐるが、同省が設置されたのは同年の四月七日であり、この記述は信用しがたい。なほ、「官員録」に従へば、同年の七月から八月にかけて、同省の商務局に勤務したとも考へられるが、渡邊洪基と旅行してゐた原敬の「周遊日誌」(『原敬關係文書』第四卷(日本放送出版協会、一九八五年八月)所収)には、八月二十五日に郷里・花巻に近い青森県の「鮫港を發す途に金子彌平に面會せり」(二六六頁)ともあり、勤務の正確な時期は判然としない。

(76) 彼は米国出身のプロテスタント宣教師で、中国名を衛三畏と云ふ。一八三三年から、禁教下の清国における伝道を開始する。天保八(一八三七)年には、日本漂流民送還を主目的としたモリソン号に博物学者として乗船したが、異国船打払令に阻まれた。ペリー艦隊の通訳官して、日米交渉の場で活躍した後、外交官に転じ、一八五八年の天津条約締結に際しては、清朝にキリスト教伝道を公認させるべく力を尽くした。また、学者としては、百科全書的な性格を有する「The Middle Kingdom」(1844)の執筆、英華辞書である『英華韻府階階』(一八四四)の編纂などを行った。また、マタイ伝や創世記の和訳も行つてゐる。

(77) 「金子彌平君」『回顧録』下巻、二〇二頁。

(78) 「金子彌平」『記傳』下巻、二二六頁。

- (79) 『興亞會報告』第三〇集(明治十五年七月三十日)の「吾會紀事」に、「金子彌兵衛。客年郷ニ歸ル。近日京ニ來タル。」(四頁)とある。なほ、『興亞會報告』第二四集(明治十五年一月三十日)の「本會記事」には、明治十四年十二月二十三日の議員会に出席したとの記述(二頁)が見られるが、翌年一月二十九日に行はれた役員選挙においては、議員に選ばれてゐない。『興亞會報告』第二五集(明治十五年二月廿八日)の「吾會紀事」(二頁)参照。
- (80) 「青森縣小湊築港に付金子彌平氏の談話」。——以下、「談話」——(「國會」明治二十五年十二月二十日)。
- (81) 「談話」(「國會」明治二十五年十二月二十日)。
- (82) 「談話」(「國會」明治二十五年十二月二十日)。
- (83) 「談話」(「國會」明治二十五年十二月二十一日)。
- (84) この出仕を品川彌二郎(一八四三年十一月二十日〜一九〇〇年二月二十六日)の援引によるものといふ記述が、『記傳』及び『回顧録』に残る。記述の詳細には錯誤が存在するものゝ、品川は明治十四年十月初旬から『興亞會』に入会してゐる——『興亞會報告』第二二集(明治十四年十一月三十日)の「吾會紀事」(二頁)——ので、彌平が品川の知遇を得てゐた可能性は否定できない。
- (85) 彌平自筆「履歷書」。
- (86) 佐藤三郎「興亞會に關する一考察」『山形大学紀要(人文科学)』(昭和二十六年八月)七頁。
- (87) 『記傳』上卷(昭和四十一年六月)四一六頁。
- 『東京日日新聞』(明治十六年一月二十三日)にも、「この會の名稱に穩かならぬとの聲多く」との記述がある。
- (88) 「吾會紀事」『亞細亞協會報告』第一編(明治十六年二月十六日)二頁。
- なほ、「本會紀事」『亞細亞協會報告』第三三篇(明治十七年二月廿五日)によれば、翌年一月二十四日の「第一年會」で議員に再選されてゐる。(一頁)。
- (89) 「吾會紀事」『亞細亞協會報告』第三編(明治十六年四月十六日)四頁。
- だが、『亞細亞協會報告』第七編(明治十六年八月二十六日)の「紀事」には、「金子故有リテ職ヲ辭ス」とあり、数ヶ月間で会計委員を退いたらしい。

(90) 『吾會紀事』『亞細亞協會報告』第三編、三頁。

なほ、『支那總説 上編』『支那總説 中編』と記述されてゐることから、『支那總説 下編』の存在が想定されるが、現存する『支那總説』は全六冊であり、『下編』は刊行されなかつたと思はれる。

(91) 現存する松方からの書状(明治十七年五月二十八日)によれば、彌平の渡米時に松方が饒別の品を送つたやうである。

なほ、『侯爵松方正義公實記』三『松方正義関係文書』第三卷(大東文化大学東洋研究所、昭和五十六年十二月)には、明治天皇が松方邸に御臨幸(明治二十年十月十四日)あそばされた際、彌平が「普通來客接待掛」を担当したことが記されてゐる(一二四頁)。

(92) 彌平自筆「履歷書」。

なほ、この「履歷書」は、異動の時期を明治十六年四月とするが、これは明らかな誤記であらう。

(93) 福澤一太郎宛福澤諭吉書簡(明治十七年六月六日)。「福澤諭吉書簡集」第四卷(岩波書店、二〇〇一年八月)一五一頁。

(94) 彌平自筆「履歷書」。

(95) 『吾會紀事』『亞細亞協會報告』第一五篇(明治十七年九月一日)一頁。

(96) 『亞細亞協會報告』第一篇(明治十九年一月廿五日)一頁。

この篇から、号数が振り直されてゐる。低迷する活動を一新する狙ひがあるものと思はれる。

(97) 『本會紀事』『亞細亞協會報告』第一八篇(明治十八年九月廿五日)六一―一二頁。

(98) 彌平自筆「履歷書」。

(99) 彌平自筆「履歷書」。

(100) 延枝との間に一男六女、後妻である平松小與志「一八八八年五月十九日―一九七〇年十一月八日」との間に二女をなした。

(101) 「金子夫人略歴」(『國柱新聞』大正四年十一月二日)。

結婚後も、「菊の屋女史」の筆名で、『讀賣新聞』明治三十一年七月二十五日―二十八日誌上に、「花精」といふ小説を寄稿してゐた。

(102) 金子彌平「信念の聲」「妙宗」(明治四十年七月号)一三三頁。

(103) 彌平自筆「履歷書」。

「官員録」には、明治二十二年一月まで記載されてをり、「彌平君ノ傳」には、明治二十二年春のこと、あり（「列傳」二〇頁）、時期を完全には特定できないが、前出の松方宛書簡を明治二十一年十月執筆と推定した上で、「履歷書」の記述を採用したい。

(104) 松方正義宛金子彌平書簡（明治二十一年九月三日）（金子正子氏蔵）。

(105) 《亞細亞協會》との合併を報ずる『東亞同文會第五回報告』（明治三十三年四月十日）の「會報」には、「亞細亞協會の有力者某々等」の「數年前より同協會の沈靜無事に經過するを憾となし」（一頁）といふ談話が残る。

(106) 山川「弔す」。

(107) 「金子彌平君」「回顧録」下巻、二〇二頁。

「金子彌平」「記傳」下巻、二二六頁。

(108) 彌平自筆「履歷書」（後日の加筆分）。

(109) 彌平自筆「履歷書」（後日の加筆分）。

(110) 彌平自筆「履歷書」（後日の加筆分）。

(111) 彌平自筆「履歷書」（後日の加筆分）。

(112) 山川「弔す」。

乃木主催の園遊會（七月十四日開催）に彌平を招待する書状が現存してをり、両者の關係が薄からざることが窺へる。

(113) 金子周平「金子彌平略歴」（私家版）。

これは、彌平の長男・周平が自分自身の記憶と家族の証言をまとめたものである。

(114) 「彌平君ノ傳」には、「五代友厚氏関西貿易会社ナルモノヲ創立シ大ニ日清ノ貿易ニ從事スルノ先鞭ヲ着ケタリシモ君ノ所説ニ成リシモノナリ」（「列傳」一九頁）とあるが、五代側の史料は残つてゐない。

(115) 金子彌平「北清漫遊所感」（東亞同文會第三三回報告）明治三十四年十月一日）一三頁。

(116) 金子彌平「信念の聲」（妙宗）明治四十年七月号）一三四頁。

- (117) 「金子彌平君」『回顧録』下卷、二〇二頁。
- (118) 金子彌平「陳情書」。
- (119) 金子彌平「陳情書」。
- (120) 金子彌平「牛莊通信」(十月八日)〔『東亞同文會第一二回報告』明治三十三年十一月一日〕三頁。
- (121) 金子彌平「陳情書」。
- (122) 「會報」〔『東亞同文會第六回報告』明治三十三年五月十二日〕三三頁。
- (123) 金子彌平「滿州視察談」〔『東亞同文會第一〇回報告』明治三十三年九月一日〕七三頁。
- (124) 同右、七八頁。
- (125) 「金子彌平君」『回顧録』下卷、二〇二頁。
 後に、この事業は日支合弁の《採木公司》に譲渡したといふ。事業譲渡の時期であるが、〔『東亞同文會報告』第一一九回、明治四十二年十月二十六日〕掲載の「鴨緑江採木公司ノ事業」といふ記事によれば、同公司は明治四十一年九月に設立されたといふ。事業の譲渡は、それ以前であらう。
- (126) 「金子彌平君」『回顧録』下卷、二〇二頁。
 辞令が現存する。
- (127) 「金子彌平君」『回顧録』下卷、二〇二頁。
- (128) 《同仁醫院》は、「清韓及び其他支東洋諸國に我日進醫學を注入し、其人衆を均しく斯學の恩澤に浴せしむ」〔『回顧録』上卷、六八九頁〕ことなどを目的とする財団法人・《同仁會》が朝鮮・滿州の各都市に開設・経営した医院である。彌平は、医師の普及を通じた日支の交流を重視してゐた。〔北清漫遊所感〕『東亞同文會第二十三回報告』二四～二五頁。
- (129) 金子彌平宛大隈重信書簡(明治四十年四月二十四日)(金子正子氏藏)。
 大隈は、《同仁會》の会長であつた。
- (130) 金子周平「金子彌平略歴」。
- (131) 金子彌平「信念の聲」『妙宗』(明治四十年七月号)一三五頁。

- (132) 『花巻市史』近代篇(昭和四十三年九月)によれば、明治天皇東北御巡幸(明治九年六月)の折、《里川口村本城小学校》を代表して、天覧授業に出席したといふ。(一〇二—一〇四頁)。
- (133) 『慶應義塾入社帳』第二卷(昭和六十一年三月)五三七頁。
- (134) 金子彌平「信念の聲」(『妙宗』明治四十年七月号)一三四頁。
同右、一三六頁。
- (135) 謹三の生涯については、『東北学院大学百年史』(三五七—三六三頁)に詳しい。
- (136) 金子彌平「信念の聲」(『妙宗』明治四十年七月号)一三五頁。
同右、一三五頁。
- (137) 彌平によれば、押川と懇意になったのは、明治三十三年(三十四年の北京滞在中であり(『北清漫遊所感』『東亞同文會第二三回報告』一九頁)、謹三を介してではないやうだ。
- (138) 軍平の妻・佐藤(旧姓)機恵子(一八七四年十二月五日—一九一六年七月十二日)は、彌平と同じく花巻の出身であり、遠縁にあたる。因みに、機恵子の兄・臯藏(一八七一年七月十七日—一九四八年三月二十三日)は、第一次世界大戦時の第二特務艦隊司令官(海軍少将)として、地中海に遠征した。
- (139) 田中智學「宗門之維新」『獅子王論叢篇』第一集(昭和六年十月)一六頁。
- (140) 金子彌平「信念の聲」(『妙宗』明治四十年七月号)一三五頁。
- (141) 金子彌平自筆メモ中の一頁。年代は不詳だが、日露戦争後に詠んだものであらう。
- (142) 金子彌平「信念の聲」(『妙宗』明治四十年七月号)一三二頁。
同右、一三六頁。
- (143) 同右、一三六頁。
- (144) 金子彌平「信念の聲」(『妙宗』明治四十年七月号)一三七頁。
山川「吊す」。
- (145) 大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』(法藏館、二〇〇二年二月)二二四頁。

- (150) 「妙宗誌友會」(『妙宗』明治四十一年七月号) 一〇一頁。
- (151) 「京都妙宗誌友會五週年紀念祝賀大警世運動」(『妙宗』第二二卷第二二二號、明治四十二年十二月) 二〇一—二五頁。
- (152) 「國柱新聞」(大正四年四月二十一日)。
- (153) 里見岸雄『鬪魂風雪七十年』(錦正社、昭和四十年) 一三五—一三六、一四二—一四四、一五一、一五九頁。
- 里見『順逆の群像』(里見日本文化研究所、昭和四十九年十二月) 八六—八七頁。
- (154) 『日蓮主義』(明治四十二年七月十二日)。
- (155) 金子彌平宛内藤虎次郎書簡(明治三十一年カ七月二十八日)(金子正子氏藏)。
- 内藤湖南『滿韓視察旅行日記』(明治三十九年八月二十日)『内藤湖南全集』第六卷、三九七頁。
- (156) 金子彌平「擄某に與ふ」(『國柱新聞』大正元年八月二十一日)。
- (157) 山川「弔す」。
- (158) 田中智學「田中智學自伝——わが濟しあと」第七卷(獅子王文庫、昭和五十二年三月) 二二—三—二二九頁。
- (159) 「金子彌平」『記傳』下卷、二三六頁。
- (160) 小松香織・小松久夫訳『ジャポニヤ——イスラム系ロシア人の見た明治日本——』Abdurraqid Ibrahim(一九九一年十一月) 三六一頁。
- (161) 『大東』(第四年二月号) 二頁。
- (162) 『公報』『大東』(第五年一月号) 六三頁、「亞細亞義會々報」『大東』(第五年二月号) 五三—五四頁。
- (163) 『大東』(第五年四月号) 七頁。
- (164) 『大東』(第五年四月号) 七頁。
- (165) 『大日本』(大正七年八月号) 八頁。
- (166) 山川「弔す」。
- (167) 「金子彌平」『記傳』下卷、二三六頁。
- (168) 金子東山「東山調」(『妙宗』明治四十二年二月号) 二二—八頁。

(169) 「吾人の詩興」〔毒鼓〕大正九年四月号) 一二頁。

(170) 「吾人の詩興」〔毒鼓〕大正九年一月号) 一五頁。

(171) 山川「弔す」。

(172) 『天業民報』(大正十三年三月十二日)。

(173) 福澤諭吉『學問のすすめ』『福沢諭吉全集』第三卷(岩波書店、昭和三十四年四月) 四三頁。

【追記】

本稿の成立にあたっては、多くの人を煩はせた。まず、血縁者といふこともあつてか、お忙しい中、福沢諭吉自筆の手紙を含む非常に貴重な史料を快く披見させて下さつたり、花巻市内を案内して下さつたりと、様々な便宜を図つて頂いた——金子明子氏、金子克彦氏、金子重和氏、金子正子氏、金子雅彦氏、山崎斉子氏の皆様(五十音順)に御礼を申し上げます。また、晩年の彌平が専心した国柱会に関する史料蒐集に関しては、田中輝丘前会長、大橋邦正・神野生両講師を始めとする国柱会の方々にご協力を賜つた。このことに対して、心より感謝してゐる。さらに、書簡の撮影や解読に際しても、先輩や知友の手を御借りした。実に有難いことだと思つてゐる。

本稿は、平成十一年に京都大学総合人間学部に提出した同題の卒業論文に加筆訂正したものである。この論文を作成するに際して多大な御指導を賜はつた宮本盛太郎先生(京都大学名誉教授)は本年四月に急逝された。謹んで御冥福を御祈りしたい。(皇紀二六六五年十一月一九日筆)